

『顯戒論』の「歸敬偈」について

高 佐 宣 長

『顯戒論』の「歸敬偈」は、一句七言の三十二句からなる。

- ① 稽首十方常寂光
- ② 常住内證三身佛
- ③ 實報方便同居土
- ④ 大悲示現大日尊
- ⑤ 稽首十方眞如性
- ⑥ 妙法一乘眞實教
- ⑦ 四教五味權實等
- ⑧ 八萬法藏一切經
- ⑨ 稽首十方内眷屬
- ⑩ 大智大悲大三昧
- ⑪ 第一義諦和合僧
- ⑫ 地前地上諸菩薩
- ⑬ 歸命臺藏盧舍那
- ⑭ 千華百億釋迦尊
- ⑮ 歸命佛性一實戒
- ⑯ 十重四十八輕戒
- ⑰ 歸命上座如來母
- ⑱ 文殊師利大菩薩
- ⑲ 歸命妙海王子等
- ⑳ 二十有餘諸菩薩
- ㉑ 歸命南嶽天台等
- ㉒ 傳戒師師諸聖衆
- ㉓ 我今顯發一乘戒
- ㉔ 利樂一切諸有情
- ㉕ 爲開圓戒造此論
- ㉖ 仰願常住三寶
- ㉗ 冥護顯護無妨難
- ㉘ 傳戒護國盡後際
- ㉙ 二種生死諸有情
- ㉚ 防非止惡護佛種
- ㉛ 自受法樂遊寂光
- ㉜ 開悟一心法性本
- ㉝ 防非止惡護佛種
- ㉞ 自受法樂遊寂光

この僅かな「歸敬偈」が、これ迄様様に議論されて來た。

最澄の戒思想の眞意、圓戒の依據する經典の正依傍依を論ずる際の根據として重要視されたばかりでなく、最澄の佛教思想全般のエッセンスを示すと看做されて來たとも言へよう。

さて、この「歸敬偈」が、前半二十二句と後半十句とに大別出來、前半の二十二句は最初の十二句と次の十句とに分けられることには異論はなからう。この十二句と十句とが、それぞれ別種の佛・法・僧の三寶に歸敬したものであることは、先學の等しく指摘するところであるが、それがいかなる三寶であるのかについては、議論が分かれて來た。ここでは、この問題について私見を述べたいと思ふ。

先づ最初の十二句について検討する。引用に附した番號の①から④まで、⑤から⑧まで、⑨から⑫までが、それぞれ佛、法、僧の三寶に稽首してゐる。

佛寶に稽首した四句は、更に①②と③④とに分けて考へられる。①②の《十方常寂光常住内證三身佛》といふのは、法華經に説かれる久遠實成の釋尊のことであると考へられる

が、この點の論證は他日に譲る。④の《大日尊》がいかなる佛か、即ち密教の大日如來であるのか否かについては、異論もあるやうだが、一應密教の大日と見るべきであらう。ただ、この大日は《大悲示現》の存在として表現されてゐることと留意したい。常寂光土の常住内證三身佛に、實報無障礙土・方便有餘土・凡聖同居土の大日尊が對置されてゐるのであるから、三身佛と大日との勝劣は明白である。その文脈で考へれば、《大悲示現》とは、常住内證三身佛の大悲の示現、と見るべきで、兩者の本迹關係を示すと思はれる。

次に法寶を考へると、これもやはり、⑤⑥と⑦⑧とに分けられる。⑤⑥は天台法華の一乘の教法を示す。⑦⑧は、一應法華以外の一切を示したものと考へられるが、⑦に《四教五味》とあるやうに、天台法華教學のフィルターを透した上で一切經が歸依の對象となつてゐるものと考へられる。

僧寶については一まづおき、以上の考察からこの十二句の歸敬する三寶の性格を考へてみたい。これまでの學説をみると、法華の三寶に歸依してゐるといふ説と、一切の三寶に歸依してゐるといふ説の二説に大別出来るやうである。しかしながら、前者の表現では、包含し切れぬ部分の残ることは疑へず、かと言つて後者では、この十二句中に明らかに存在する中心、核といったものを無視することとならう。折衷案といふ訣ではないが、法華を中心とした一切の三寶に歸敬して

ゐるとも言ふべきであらう。

これを更にもう一步踏み込んで表現するとするならば、《天台法華宗の三寶》と言へるのではないか。佛は久遠の釋尊と大日であり、天台法華宗の兩輪である止觀業と遮那業に對應すると考へられ、《八萬法藏一切經》は《四教五味》を冠せられ、法華開會を経てゐると把へ得るので、強ち無理な見方ではあるまい。僧寶についても、⑨の《内眷屬》の語などが、それを裏附けると言へよう。

次に⑬から⑳までの十句についてみると、これは一般に梵網の三寶に歸命したものと考へられてゐるが、管見に入つたところでは、佐佐木憲徳博士がこれに異論を立て、この十句は圓戒に歸命したものであるとしてゐる。博士は、⑬の《佛性一實戒》の《一實》は、⑭の《一乘眞實》の略であり、佛性一實戒は圓戒の異名であつて單なる梵網戒ではない、と主張した。尙ほ、この《一實》の語については、他に、『摩訶止觀』に見られる《中道一實之理》、《圓頓一實止觀》の《一實》を繼承したとの説もある。

《佛性一實戒》の語は、最澄の著作中他に用例が見當たらず、問題となるところであるが、最澄に於ける《一實》の語の用例をみると、例へば、『守護國界章』に於いて、天台法華宗の依經について述べてゐる有名な部分に、

今山家所傳圓教宗依經。正依法華經及無量義經。傍依大涅槃

『顯戒論』の「歸敬偈」について（高 佐）

榮。華嚴。維摩。方等般若。甚深諸大乘所說圓教。文殊問般若。般舟。大方等。請觀音。虛空藏。觀普賢。遮那一切。說
レ圓等諸經諸論等。一先開三權教。後會二實經。一

とある。(三權)と對置されてゐるところから、(一實)は(一乘眞實)の略と考へられるが、依經との關係をみれば、限定的には(一實)とは法華經及び無量義經のみを指す、とすら言ひ得るかもしれない。

『摩訶止觀』の(一實)を繼承したとする説も、(一實)が(一乘眞實)の略であるといふ考へと矛盾對立するものではないと考へられるので、相補的に、或るひは前者を後者に吸收する形で、二説を受け容れ得ると思はれるが、いづれにせよ、(一實)は天台法華の文脈で考へられねばならない言葉であると言へる。

では『佛性一實戒』の(佛性)の方はどうかといふと、これについても、梵網經の繼承とする説と涅槃經からとする考へ方とがあるやうである。どちらであると斷定出来る程の決め手はなく、或るひは最澄に兩者を統合する意圖があつたかとも考へ得るが、結局のところ、『佛性一實戒』は單なる梵網戒とは一線を畫すべきものであるといふことになると言へよう。

順序が逆になつたが、⑬⑭の佛について検討する。これは一見して梵網經の經説を承け繼いだことが明らかである。こ

の⑬⑭や、⑯の《十重四十八輕戒》などの表現から、⑬から⑳の十句が梵網に歸依したものと考へられて來たやうであるが、『內證佛法相承血脈譜』の「天台圓教菩薩戒相承師師血脈譜」をみてみると、これも《蓮華臺藏世界赫赫天光師子座上盧舍那佛》から始まつてをり、⑬の佛は、天台圓教菩薩戒の佛、とも把へ直し得るのである。

既にみたやうに、『佛性一實戒』は單なる梵網戒とは言へないが、では何であるのかと言へば、やはり(圓戒)であると言はねばなるまい。即ち、⑬から⑳までの十句は、(圓戒)Ⅱ《天台圓教菩薩戒》の三寶に歸命したものであると考へられる。

⑯に《十重四十八輕戒》とある以上、⑯の《佛性一實戒》はこれと同義語で、梵網戒のことである、とする見方もあり得るが、これは成立しない。

佛	十方常寂光 常住內證三身佛	實報方便同居土 大悲示現大日尊
法	十方眞如性 妙法一乘眞實教	四教五味權實等 八萬法藏一切經
佛	臺藏盧舍那	千華百億釋迦尊
法	佛性一實戒	十重四十八輕戒

右表は、『顯戒論』「歸敬偈」の①から⑳までに示された佛

及び法の構造を整理したものである。

上段は本末の本、勝劣の勝、或るひは中心であり、下段は末乃至劣、周邊といふことになる。少なくとも右三列の優劣は明らかであり、さうなると、『佛性一實戒』と『十重四十八輕戒』のみが同義、等價であるとするのは、いかにも不自然である。従つて、『佛性一實戒』はやはり『圓戒』で、⑬から⑳の十句は『圓戒の三寶』に歸敬したものと考へるべきである。

僧寶の考察が遅れたが、⑱の『妙海王子』は「天台圓教菩薩戒相承師師血脈譜」の説明中に登場するし、㉑の『南嶽天台』は説明の要もあるまい。⑰⑱では一向大乘寺の上座たる文殊菩薩に歸命されてゐるが、これは明らかに梵網の僧寶とは言へない。一向大乘寺は、圓戒を受持した天台法華宗の菩薩僧の修業する寺であり、また、文殊は『授菩薩戒儀』に於いて圓戒の受戒の際に勸請されてゐるので、圓戒の僧寶としては會通が可能である。

以上をまとめると、①から⑫の十二句は『天台法華宗の三寶』、⑬から⑳の十句は『圓戒の三寶』に、それぞれ歸敬したものであるといふことになる。

これは『内證佛法相承血脈譜』に示された思想と合致するが、『顯戒論』は『上顯戒論表』及び『内證佛法相承血脈譜』とともに上提されたものであり、この一致は極めて自然であ

『顯戒論』の「歸敬偈」について(高佐)

る。換言すれば、両者が一致するといふことは、以上のやうに「歸敬偈」を理解することの傍證ともなるのではなからうか。

尙ほ、①から⑫までは『稽首』が冠せられ、⑬から⑳までは『歸命』で始まつてゐることに注目し、前者より後者の方が意味が重く、従つて⑬から⑳までの梵網に『歸命』した部分の方に最澄の眞意があり、圓戒が正依梵網であることを傍證する、とする學説がある。⁷⁾『稽首』と『歸命』との輕重についても問題なしとしないが、假に『歸命』の方が意味が重いとしても、⑬から⑳の十句が梵網の三寶に『歸命』したのではないことが明らかになつた以上、この説は成立しない。では圓戒の依經の正依傍依はどう考へるべきか、といふことになるが、それはこの小稿で論じ得る問題ではないので、別の機會を得て考察して行きたい。

また、「歸敬偈」の眞僞について検討の餘地がある、との説もあるが、これについても今後の課題としたいと思ふ。

- 1 『傳教大師全集』卷一 25—26頁。
- 2 佐佐木憲徳『日本天台の諸問題』16—17頁。
- 3 石田瑞麿『日本仏教における戒律の研究』163頁。
- 4 『傳教大師全集』卷二 264頁。
- 5 『大正新脩大藏經』第二十四卷 1003頁b 參照。
- 6 『傳教大師全集』卷一 230頁。
- 7 石田前掲書 197—199頁。

(立正大学大学院)